青柳園だより

２０２３年
１２月号
文京区立青柳幼稚園

想像する力、信じる力　～まなざしを共有しながら　ともに楽しむ～

園 長　和島 千佳子

園生活の中で、子どもたちは毎日、先生の声でお話を読んでもらい、クラスの友達と一緒に絵本や紙芝居などお話の世界を楽しんでいます。

動物と話をしたり、びっくりするくらい大きな果物があったり、おじいさんが落とした片方の手袋にたくさんの動物が入ったり…など、絵やお話の世界では、現実ではありえないようなことも成り立ちます。子どもたちは、お話の展開の中で、喜びや驚き、期待、少しの怖さなど、さまざまな感情を味わいながら、最後は幸せな結末になることを信じて、お話の世界に身を委ね、安心して冒険します。

そうやって、４月からクラスの友達や先生と、お話の世界を遊んできた子どもたち。その面白さや、幼稚園で遊んでいる楽しいことがつながって、今の園生活があります。それが、「あおやぎ劇場」の、もも組、ゆり組のそれぞれの劇になっています。

子どもたちは、動物になりきって動いたり、何かのお仕事をしている人になってふるまったりするなど、自分とは違う「誰か」の役を担って動くことから、役割を通して他者の感じ方に気付いているようです。また、今まで気付いていなかった自分の新たな面に気付いたりもしているようです。

少し長くなりますが、児童文学者・翻訳家の松岡享子氏の著書「サンタクロースの部屋―子どもと本をめぐって―」（こぐま社）の一節を紹介します。

幼い日に、心からサンタクロースの存在を信じることは、その人の心の中に、信じるという能力を養う。（略）心の中に、ひとたびサンタクロースを住まわせた子は、心の中に、サンタクロースを収納する空間を作り上げている。サンタクロースその人は、いつかその子の心の外へ出て行ってしまうだろう。だが、サンタクロースが占めていた空間は、心の中に残る。この空間に、人は成長に従ってサンタクロースに代わる新しい住人を迎え入れることができる。この空間、この収容能力、つまり目に見えないものを信じるという心の働きが、人間の精神世界のあらゆる面で、どんなに重要かはいうまでもない。のちに、いちばん崇高なものを宿すかもしれぬ心の場所が、実は幼い日にサンタクロースを住まわせることによってつくられるのだ。別に、サンタクロースには限らない。魔法使いでも、妖精でも、鬼でも、仙人でも、ものいう動物でも、空飛ぶくつでも、打出の小槌でも、岩戸をあけるおまじないでもよい。幼い心に、これらのふしぎの住める空間をたっぷりとってやりたい。

私は、これを読むたび、このことが「生きる力を育む」ということなのだろうと深く感じ入るのです。

「あおやぎ劇場」では、子どもたちがお話の世界へのまなざしを共有しながら、お話の中の役を担い、友達と一緒に楽しんでいます。その中に、きらりと光る表現や、成長の姿が見られます。

保護者の方にも、子どもたちの表現する世界へのまなざしを、子どもたちや保護者のみなさんと共有しながら、ともに楽しんでいただき、子どもたちの成長を感じていただける場になるといいなと願っています。

２学期ももうすぐ終わります。保護者の皆様、地域の皆様、さまざまなご協力をありがとうございました。